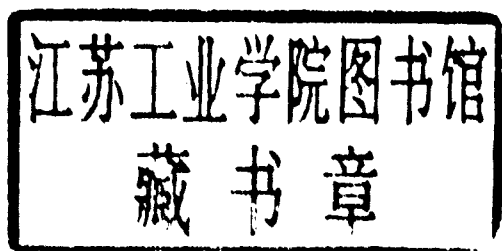


作品研究『ベーオウルフ』

荏 部 恒 徳 訳



英 宝 社

荻部恒徳「かりべ・つねのり」

一九三七年大阪府豊中市生まれ。一九六五年東京都立大学大学院博士課程満期退学。

現在、新潟大学教授。
〔現住所〕新潟県西蒲原郡西川町鱈一七四

シッピー著 作品研究『ペーオウルフ』

1990年10月20日 印刷 1990年10月25日 発行

訳 者 荻 部 恒 徳

発 行 者 佐 々 木 峻

東京都千代田区三崎町 1-1-8

発行所 © 株式会社 英 宝 社

東京都千代田区三崎町 1-1-8 (〒101-91)

電話 [03] (292) 0167-9 振替東京6-257

[共同英文センター・若戸製本]

定価 2,000 円 (本体 1,942 円)

監修者のはしがき

この英文学研究シリーズ (Studies in English Literature. 本書はその No. 70) の目的は学生に広く読まれていると思われる小説、劇、詩集および評論集の作品研究を提供することである。解明と評価に重点を置いており、伝記的歴史的事実は、作品の特定の要素に光を投げかける時には論じられるが、普通は批評の下位に置かれる。これはどんな種類の作品なのか。ここにはまさにどんなことが述べられているのか。この作品はどの位優れているのか、また何故優れているのか。このような問題を各執筆者は書くようとしているのである。

強調しておかなくてはならないのは、これらの研究は読者が既にその作品を精読しているという前提のもとに書かれているということである。これは学生が自分の読んでいない作品について意見を述べることができないようにするためであり、読んだことのある他の作品に当てはまる既成概念を持ち出すことができないようにするためでもある。ある意味ではすべての批評的解釈は

読者に意見を押し付けることだともみなせるが、この見方を受け入れることは学生に対してであれ、他の誰に対してであれ、彼らに向けてなされるとどんな種類の批評的議論にも含まれる有益さを否定することである。このシリーズの作品論の目的はコールリッジが、論じられている作品についての「考察の助け」(aids to reflection)と別の文脈で呼んだものを提供することである。解釈は決定版としてよりはむしろ提案として出されているが、これは読者を刺激して彼自身の洞察を發展させることを願うてのことである。これが結局ものの分かる人たちに供されるあらゆる批評コースの役目なのである。

この種の研究が興味を喚起したので、規模を拡大して始めは純然たる英文学からアメリカ文学の作品もいくつか選んで含めることになったが、今は更にコモンウェルスの作家によって英語で書かれた作品も選んで含めることになった。規準は変わらず、作品自体が重要なものであり、学生に広く読まれていることである。

デイヴィッド・デイシエス

目

次

一、序 (Introduction)	3
--------------------------	---

二、『ペーオウルフ』の世界 (The World of the Poem)	14
---	----

言葉と意味 (Words and meaning)	14
---------------------------	----

登場人物と感情 (Characters and emotions)	21
-----------------------------------	----

金銭、価値、威信 (Money, worth, prestige)	28
-----------------------------------	----

剣、広間、象徴 (Swords, halls, and symbols)	36
--------------------------------------	----

引喩と現実 (Allusion and reality)	42
------------------------------	----

三、『ペーオウルフ』の構造 (The Structure of the Poem)	52
---	----

対照と交差織り (Balance and interlace)	52
---------------------------------	----

脱線の含意 (The implications of digression)	54
--	----

アイロニカルなイメーヅ (The ironic image)	66
--------------------------------	----

遂行と知覚 (Performatives and perceptions)	75
---------------------------------------	----

異教徒と怪物 (The heathens and the monsters)	83
--	----

四、詩とその機能 (<i>Poetry and its Functions</i>)	91
--	----

複合語、変奏、定型 (<i>Compounds, variations, formulas</i>)	91
--	----

断片化と制御 (<i>Fragmentation and control</i>)	99
---	----

平衡、冗語法、疊語法 (<i>Stasis, pleonasm, cumulation</i>)	107
--	-----

格言的な声 (<i>The gnomic voice</i>)	116
-----------------------------------	-----

五、あとがき (<i>Afterword</i>)	124
-----------------------------------	-----

訳者あとがき.....	129
-------------	-----

訳注.....	135
---------	-----

参考書目 (<i>Further Reading</i>)	150
---------------------------------------	-----

索引 (<i>Index</i>)	153
---------------------------	-----

作品研究 『ベーオウルフ』

一、序 (Introduction)

『ベオオウルフ』批評は誤謬と先入観念とで始まった。一七〇五年にハンフリー・ウォンリー (Humphrey Wanley) ^(訳注1) は、この詩には *descripta videntur bella, quae Beowulfus (quidam Danus ex Regia Scyldingorum stirpe ortus) gessit contra Sueciae Regulus* 「(シユルディング族 (Scyldings) の王家の出であるデイン人たる) ベオオウルフ (Beowulf) がスウェーデンの小王たちと闘った戦のことが記されているのが見られる」と書いた。この要約に述べられている事柄はすべて間違っている。この詩の主人公はデイン人でもシユルディング族でもなかったし、彼は確かにスウェーデン人と戦をしたけれども、詩人がその説明にあたっているのは、三千余行のうちほんの六行 (391-6) ではない。ウォンリーはこの詩に二人のベオオウルフがいることに惑わされたのだが、叙事詩というものは「戦争と人間」、即ち王朝の創設と軍事的な国家の誕生を主題とすべきだという思い込みによってさらに重大な誤解をしたのだった。一八一五年に『ベオオウルフ』の最初の印刷本を

発行したアイスランド人であるグリームル・トゥアケリン (Grímur Thorkelín) ^(訳注2) は、主人公の国籍の点ではウォンリーの誤りを訂正するほど知識はあったのだが、この詩はデイン人の武勲を主題としている、即ちホーマーの『イーリアス』(Iliad) やヴァーギルの『アエネーイス』(Aeneid) に比すべき「シユルデインギッド」(Scýldingid) ^(訳注3) なのだ、なお主張せずにはいられないと思った。

古き時代の人々のこうした誤りは、多分避けられないものではなかったであろうが、今なおよくあるてのものだ。『ペーオウルフ』の批評家は皆この詩をどこかで自分たちの時代の「審美眼」(good taste) の規範に同化させたいという誘惑を感じている。これらの規範はトゥアケリンの時代のように新古典主義的で国家主義的であることもあるし、現代のように社会的意識と道徳的関心であることもある。これは一部にはこの詩が無防備だからである。我々にはそれがいつ、どのようにして、だれによって、どんな種類の聴衆のために書かれたか分かっていない。それ故に、それに「背景となるもの」(Back-grounds) をはめこみ、それに従って解釈をしなければならぬと主張しやすいのである。しかしながら、数世紀にわたって不安定な批評が続いたことは、偶然にしる何か根本から挑発的なものがこの詩にあることも暗示している。ブリジッド・ブローフ ^(訳注4) (Brigid Brophy) と彼女の同僚が『不必読文学五十選』(Fifty Works of Literature We Can

Do Without) のリストにまずこの詩を挙げているのもこのためである。この本のおかげで蜜酒のがぶ飲みや知恵遅れの自由民について大学生に言い習わされた冗談が生み出され、キングスリー・エイミス (Kingsley Amis) ^(訳注5) は彼の搔痒詩 (itch-scratching poem) を書いた。——

So, bored with dragons, he lay down to sleep,
 Locking for good his massive hoard of words ...

それで、龍に退屈した彼は横になって眠った、
 言葉の一杯詰まった宝庫に永久に錠かけて……

こうした狙い撃ちのすべてに共通した要素は当惑であることに留意すべきだ。『ペーオウルフ』は読者に（特に熟練した読者に）、素朴な人々がフランス人が本式に人前でキスをし合っているのを初めて見るときのあの——驚き、恐怖、社会的信号がもはや本来の意味をもたないという啞然とした——気持ちを再三懐かせる。これに対処する方法は笑うことである。そうすればタブーは漫画化されて受け入れ可能になる。もっと上品な回避手段はそっぽを向くことである。しかしながら、社会的信号は恣意的で習慣的なもので、それが属する制度の内部でのみ理解される

ものだという事実を把握することによって真実に到達できる。この万能の洞察力がなければ、『ペーオウルフ』は批評にほんろうされて、いつまでも不可解なものに留まるのである。

自慢 (boasting) を例にとろう。我々自身の文化では謙遜した卑下が非常に強調される。自分のことを高く無条件に良く言うことはすべての場合に間違っている。この禁示命令はスペンサー (Spenser) やシェークスピア (Shakespeare) の「己れの臆病さを言葉で隠す「ほら吹き兵士」 (braggart soldier) や五十年前の通俗小説の「強い、無口の英国人」 (strong, silent Englishman) (彼らの無口は彼の力の指標だったことに留意せよ) のような文学的紋切型によって補強されている。だが『ペーオウルフ』はそんなことは無視している。主要な戦いの前にはきまって少なくとも一回は自分自身の勇気を賞賛する演説をし、偉業を成し遂げること (六三二―八行)、グレンデル (Grendel) の母親がどこに隠れようと追跡すること (一三九二―四行)、龍からは一歩たりとも逃げないこと (二五二四―七行) を約束する。この最後の時にはさらに部下に自分のお供をしないように命じる。「怪物に対し己れの力を試し、英雄的偉業を行なうのはお前たちに無理な遠征であり、我以外のなんびとにも叶わぬことである」 ('Nis þæt eower sið, / ne gemet mannes, ne fne) min anes, / þæt he wið aglæcan eofoð dale, / eorlscepe efne. 2532-5)。彼はこの場合間違っていたことが明らかになる (部下の一人が彼を救助にくる)。(それで批評家たちは自慢は許しがた

いことなのだと思ってきた。でもこの詩の他の人物たちは彼の演説を評価し賞賛している。デネの王妃についてこう語られている。――

Dam wife þa word wel licodon,
gilpcwide Geates. (639-40)

これらの言葉はこの婦人にはいたく気に入った、
イエアタスの人の自慢の演説は。

我々の困難は *gilp* なる語に要約される。この語は『ベーオウルフ』で十三回、大部分は良い意味で用いられているが、現代英語には“yelp”、即ち駄犬の卑しむべき無意味な叫び声として生き残っている。その様な意味的文化的推移があるため、ベーオウルフを公平に見ることは困難であり、特に、彼が自慢に自ら設けた制限が我々のものとは違っているとはいえ、彼が一つの制限を非常に厳格に守っているのだということに気づくのが困難になっている。彼のすべての「自慢の演説」(*gilpspræce*)で彼は決して成功は約束していない。彼は成功かしからずんば死を約束しているのである(六三六―七行、一四九〇―九一行、二五三五―七行参照)。これら三つの演説の

結びが驚くほど似ていることから分かるのは、ベーオウルフの文化に属する人々は我々同様ほら吹きと約束を区別していたけれども、我々とは違って自分自身の意思の力に自信を持つことは許されていたということである。これは確かに一つの違いではあるが、ばかげた違いではない。

従って『ベーオウルフ』に公平に反応するには謙遜に対する相対的見方が必要である。同じことが飲酒の場合にも当てはまる。この詩ではエール、ビール、ワイン、蜜酒が四十回以上も言及されているのに対し、食べ物はいずれの品目も表す言葉がない。これが現代に多く見られる反発の原因であることは明らかだ。さらに悪いことには、登場人物たちは飲酒を満足そうに眺めている。ベーオウルフがウンフェルス (Unferth) に君は *beore druncen* (531a) 「ビールに酔って」ブレカ (Brecca) のことを喋りまくったと言ったとき、ウンフェルスは「ビールに酔って」いるので信頼できない、という意味で言っているのは明らかである。しかしながら、デネの王妃ウェアルホセーオウ (Wealhtheow) が次のようなヘオロト (Heorot) の館の牧歌的な (idyllic) 叙述の中で同一語を用いるとき、またしても意味が難解になる。「ここでは皆が互いに真心をもち、主君には優しく忠実であり、近侍の武士は心を一つにし、国民はすべて役立ちたいと思い、酒に酔った家来たちは私の言う通りにします。」 (*Her is aeglwylc eorl oþrum getrywe, / modes milde, mandrīnne hol[d], / þe gnas syndon gefwære, þeod ealgearo, / druncne dryhtiguman doð swa ic biðde.*)

1228-31)。この段階で現代英語へ翻訳者たちが、*druncne* を *carousing* 「飲み騒ぐ」なり、*cheered with drink* 「酒を飲んで陽気になった」なり、*wine-glad* 「ワインに喜んだ」なり、更に遠回しの言い方に訳すとき、不安が顔を覗かせている。しかし問題は文化の問題である。つまり我々は *druncne* が *true* 「真心を持った」や *loyal* 「忠実な」や *united* 「心を一つにした」のような語と結びつかないと思われるというだけで、それを *drunken* 「酔った」と訳せないのだ。我々の慣習的知恵からすると、酔っ払いは性格の弱さと結びつくからである。一つの結果として我々はベールオウルフが六〇三—六行で想像しているような次のような場面における暖かさと陽気さとの意図的な喚起に反応しにくくなっている。——

‘Gaþ eft se þe mot

to medo modig, sippan morgenleoht

ofer ylða bearn opres dogores,

sunne sweglwered supan scined!’ (603-6)

「赴くことのできる者は再び赴くであろう、

宴の席に勇氣ある者は、朝の光が